

信 毎 歌 壇

米川 千嘉子 選

哀しみは哀しみのまま残るらん笑い皺なき夫の死に顔
 ペタンペタン自ら言つて餅を搗く病の子等は
 今を生きてゐる (塩尻市) 丸山 葉子
 もの忘れひどくなりたる君とわれ時かけて得し平
 穩は宝と思へど (長野市) 近藤 光子
 父死して空き家となりしが生家雪を下ろすは虚
 しかりけり (松川村) 岡 豊村
 縄文の遺跡より出でし櫛で知る紫式部は堅き木な
 るを (箕輪町) 向山 政俊
 「ばあちゃんひとりだけとポッチじゃない帰
 りゆく孫に言われしと友(駒ヶ根市) 塩沢 春子
 「青崩」神秘の響き海えたる峠の隧道遂に貫通
 (長野市) 宮崎 雄
 コーギーを飼つてはどうかと孫娘認知症の予防の
 ために (飯綱町) 坂井 寿男
 元旦や家族団らん十人で生存一人と能登は無情な
 (佐久市) 伴野チツ子
 どこにでも力関係生む土壤遠端の花自力で生きる
 (佐久市) 水間喜美子

第一首、心に残る介護の歌が多かった佐々木さん。12月に亡くなられた夫君の挽歌となった。心深い一首に瞑目する。第二首、「ペタン」という声がじつにあどけなく温かく、印象的。第三首、「時かけて得し平穩」に説得力がある。その平穩に忘却がくる。第四首、重労働の雪かきもそこに住む家族のためならば頑張る張り合いがあるが、真っ白な雪の下、父亡き新しい闇の痛いような冷たさ。

選評

小池 光 選

録音の我が声聞いて驚きぬこんな声とは知らず
 るあたり (中野市) 増田きみ江
 忘れぬはじめてひらいた教科書に「おはなをか
 ざるみんないいこと」 (長野市) 西村満知子
 二人ずつ並んで四人で中学へ通った三人遊きてし
 まえり (佐久市) 臼田宇多子
 オリオンあの三ツ星は幼き日ほくが見つけたほ
 くの三ツ星 (小諸市) 星野 直人
 断捨離にできし祖母の銀煙管いまなほ脂の匂ひ
 を残す (長野市) 丸山 祐司
 身をよじり一人で背中に湿布貼る九十一歳母の日
 常 (長野市) 伊藤 恵子
 何事も考えずにただ歩を運ぶ音が枯れてる川沿い
 の道 (松川村) 岡 豊村
 いつからか暗き廊下を恐れずに歩けるやうになり
 てをりたり (長野市) 原田 浩生
 どのオフィスもガリ版だった昭和生き令和の機器
 にとまどうばかり (松本市) 興 絹枝
 年明けて八十四になる我は尚学ぶごと日々楽し
 き (箕輪町) 向山 政俊

第一首、これは本当のことで録音されたわが声を聞くとびっくりしてしまう。こんな声なのかと思つて絶句する。じぶん自分のことはわからないものだ。第二首、小学一年の国語教科書。どんなに輝いていたことだろう。今日までその文面を覚えている人はめずらしい。第三首、これも学校の思い出。4人で通つていまじぶんだけになつてしまった。2人ずつ並んで4人で。ここが具体的でよい。

選評

小島 なお 選

ほんのりと鬚頂産毛猫柳地震被災地厳冬の
 中 (下條村) 福嶋田鶴子
 天井に雨漏りの跡広がりがりて侵攻されゆく領土見る
 ごと (伊那市) 堀米 好美
 数行を読んで目を上げ図書館の大きな窓の冬景色
 見る (松川村) 岡 豊村
 馬鹿笑ひする娘にも悩みあり半日ピアノを弾き続
 けてる (千曲市) 石黒 信幸
 クリスマスツリーの彩どろイスカの群れダフニス
 の祖母となり野に探す (佐久市) 篠原 敬子
 日に三度空の引き出し開けに行け「誓も」スプー
 ン」も席替ををして (千葉県成田市) 清水 洋子
 日本語を一言たりとも話せぬも家族連れ言う綺麗
 なサンキュー (佐久市) 安藤智恵美
 千曲川白鳥飛来首高く胸を濡らさず羽をひろげて
 (千曲市) 倉石みつる
 高一の孫娘の頭を撫でよとのおろした右手そつと
 はすされる (大町市) 小西 美恵
 髪の毛は縦線四本産まれたる妹を描く五歳の兄は
 (長野市) 小池 秀雄

第一首、ニュースに映る能登の人、能登の景色。嬰兒の頭や猫柳の花穂の産毛が、懸命に春を待っている。第二首、じわじわと少しずつ、着実に広がってゆく染みに遠い戦地の不穏を見ている。第三首、手元の本の世界から大きな冬の世界へ。視界が一気に広がりますがすがすがしく立体的な景色がたちあがる。第四首、豪快であかるい娘。けれど今日は、彼女の繊細な感情のメロディーにそつと耳を傾ける。

選評

佳作

送迎車急停止して横断路端の親子の渡り切り待つ
 (下諏訪町) 竹沢 和昭
 午前二時突然テレビの音聞こゆる百の姑はまた眠
 れぬか (飯田市) 安江 恵子

佳作

年頭に立てし計画その幾つ叶えて爺と注連飾り絢
 う (長和町) 羽毛田 栄
 雪深き里なれば赤き消火栓背高くあり暖冬の新春
 (安曇野市) 東野 行岳